



核物質管理センター ニュース

NUCLEAR MATERIAL CONTROL CENTER NEWS

日本のプルトニウム管理状況について

核物質管理センター 企画室

平成30年7月31日開催の第27回原子力委員会に平成29年末における標題情報が報告¹されたので、その概要を以下に紹介します。

1. プルトニウム管理状況の報告

日本は、原子力基本法に基づき原子力の研究、開発及び利用を厳に平和の目的に限って推進することとし、核不拡散条約（NPT）に加盟し、国際原子力機関（IAEA）と保障措置協定及びその追加議定書を締約し、国内の関連活動に対して国内保障措置制度を整備するとともに、IAEAによる保障措置の適用を受け入れている。

そうした中、日本は、プルトニウム利用の透明性の向上を図ることが望ましいとの観点から、平成6年以降、毎年、プルトニウムの管理状況を公表してきている。

また、日本を含む関係9ヶ国（米国、ロシア、イギリス、フランス、中国、日本、ドイツ、ベル

ギー及びスイス）で検討を行った結果、平成9年12月に「プルトニウム国際管理指針²」が採択され、以来、同指針に則って、毎年、民生プルトニウムの保有量をIAEAに提出し、そこから国際社会にも発信されている。

民生プルトニウムの保有量を含むプルトニウムの管理状況を国内外に公表するにあたっては、内閣府が当該情報を取りまとめ、原子力委員会に報告している。

目次

●日本のプルトニウム管理状況について	1
●日本におけるプルトニウム利用の基本的な考え方について	6
●国内計量管理制度（SSAC）トレーニングコースへの参加（報告）	8
●第28回原子力供給国グループ（NSG）総会について	11
●包括的核実験禁止条約機関（CTBTO）準備委員会第50会期会合について	13
●NMCCのページ	15
●動静・編集後記	16

¹ 原子力委員会ウェブサイトを参照されたい。（<http://aec.go.jp/jicst/NC/iinkai/teirei/siryu2018/siryu27/index.htm>）

² IAEAの文書（INFCIRC/549、1998年3月16日付け）から入手できる。（<https://www.iaea.org/publications/documents/infcircs/communication-received-certain-member-states-concerning-their-policies-regarding-management-plutonium>）

動 静*

2018.9.10～14 IAEA理事会 (オーストリア、ウィーン)
2018.9.17～21 第62回IAEA総会 (オーストリア、ウィーン)
2018.9.24 IAEA理事会 (オーストリア、ウィーン)
2018.11.5～7 CTBT準備委員会第51会期 (オーストリア、ウィーン)

2018.11.5～9 IAEA国際保障措置シンポジウム (オーストリア、ウィーン)
2018.11.19～23 IAEA理事会 (オーストリア、ウィーン)

*ここに掲載している会合等は必ずしも全てが公開参加型とは限らないことをお断りします。また、2か月先までのスケジュールについて網かけ表示しています。



編集後記

先月号で触れた五畿七道は京都を中心とした地方との間を結ぶ幹線道路でしたが、時代の変遷とともに街道そのものもまた変容していきます。

平安末期に勢力を拡大した武士階級は鎌倉幕府を成立させ、その後、約700年の間、幕府の置かれた場所こそ異なれ、武士による政治支配が続くことになりました。五畿七道中、東海道は京都と鎌倉の間を繋ぐ大動脈として一層の発展を見せていきますが、一方、鎌倉時代(諸説ありますが、現在は1185-1333年との説が有力)には鎌倉を中心とした軍事用の道路網も整備されました。

ところで、有名な「いざ鎌倉」という言葉は、ご存じのように「鎌倉幕府に一大事が起こったらすぐに駆けつけなければならない」という意味ですが、謡曲「鉢木」はそれを象徴的に語っています。現在の栃木県・佐野(一説では群馬県・高崎市)に佐野源左衛門常世(さのげんざえもんつねよ)という貧しい武士が住まっていたが、とある雪の夜、老僧が一晩の宿を借りに訪ねてきます。源左衛門はほとんど蓄えのない中から粟飯をふるまい、大切にしていた鉢植えの梅・松・桜の木を囲炉裏にくべ、「かくも落ちぶれてはいるが、いざ鎌倉の折には一番に馳せ参じる覚悟だ」と語りました。その後、鎌倉幕府から招集がかかり、源左衛門はかねて語ったとおり鎌倉道を急ぎました。幕府に到着すると、そこにいたのは一晩の宿を貸した老僧。この老僧こそ執権を辞した後の北条時頼で、源左衛門の心意気に打たれた時頼は、火にくべられた鉢の木にちなんで梅田、松井田、桜井という名の土地を与えたということです。

佐野源左衛門が馳せ参じた鎌倉道は関東地方を中心に各地に張り巡らされていました。とりわけ主要な道が、上道(かみつみち)、中道(なかつみち)、下道(しもつみち)でした。

上道は西の道とも呼ばれ、鎌倉から境川(現在

の横浜市と藤沢市の市境の川)沿いに北上、武蔵国府(現在の府中市)を抜け、比企丘陵の麓(現在、このあたりを八高線が走っています)を渡り、藤岡市、高崎市といった群馬県南部に至り、その先は信濃方面まで繋がっていきます。

中道は、大船から戸塚を経て、鶴ヶ峰～中山～江田(荏田)～二子多摩川(現在の厚木街道沿い)を抜け、渋谷、高田馬場を経て、赤羽(岩淵)～川口～鳩ヶ谷～岩槻～幸手(後の日光御成街道)を北上し、栗橋～古河～小山～宇都宮(後の日光街道)に至り、さらには奥州へと続いていきます。このため、奥州道とも呼ばれるそうです。

そして、下道。鎌倉八幡宮から金沢海道を東に向かい、金沢八景から大きく左折し、大岡山～日吉～丸子～高輪～大手町を経て、蔵前～浅草(今日の当センターの東京の事務所はこの辺り)～松戸(後の水戸街道)に至り、常陸の国まで続いていました。五畿七道の東海道の終着点です。

今日、鎌倉街道を歩いてみると、平素は農業を営んでいる御家人たちが「すわ」という時に駆け参じた道であった往時の空気を感じることがあります。鎌倉は天然の要塞のような町であったとも言われますが、細い鎌倉道は、外部から侵攻する者を両側から攻撃する等、外敵を排除するにはもってこいの道であったでしょう。鎌倉道は武家文化の成り立ちを考えさせてくれるように思います。(企)

(注) 国土交通省発行の『五街道・歴史街道を活かしたまちづくりに関する調査』及び『関東の道路 歴史と役割(鎌倉街道図)』を参考にしました。

